

老いる世界

| 木下 利彦 Toshihiko Kinoshita

私は、2024年3月末日に定年退職いたしました。4月以降は関連病院の顧問として働いております。6月末から2週間、ドイツおよびスイスに旅行してまいりました。3つほど、目的がありました。1つが、ル・コルビジエが建てたロンシャン礼拝堂に行ってみること。2つ目は久しぶりに30年前に留学したチューリッヒを訪ねること。3つ目はアルプスの麓、トゥーン湖畔のスピッツに滞在することでした。ロンシャン礼拝堂は、想像以上の田舎でして、電車が2時間に1本程度の無人駅で、観光客もまったくないような場所でした。同伴した家内が「行く場所を間違ったのではないの」と驚いていたような場所でした。言われた瞬間、私も一瞬そうかなと思ってしまいました。そんなはずはないと山のほうへ20分ばかり登って到着しました。実に素晴らしい建築物です*。さすがコルビジエと納得した次第です。若き日の安藤忠雄がこの建物を見て建築家をめざしたとのこと。ミュンヘンからフライブルグ、ロンシャン、チューリッヒと鉄道の旅でしたが、30度超えの蒸し暑さには閉口しました。かつての夏のヨーロッパとは隔絶したものでした。明らかに異常気象の影響を実感しました。さすがにスピッツは涼しかったですが、やはり昼間はエアコンがないと困る状態でした。凄まじい異常気象に並ぶもう1つ大きな問題として、今回のテーマである、世界の高齢化「老いる世界」の話をしたと思います。

現在の世界人口は約82億人。今後50~60年程度は増加を続けますが、2080年代に103億人でピークに達した後、減少に転じるといわれています。また、2080年代には高齢者人口が子どもを上回ります。国連は2年ごとに人口推計を公表していますが、10年前の予想より人口減少のスピードが速まっているようです。特に中国は人口減少が著し

く、すでに日本と同様に人口のピークが過ぎ、2100年には6億3,300万人になるとされます。現在の中国の人口は、公表では14億1,900万人ですから半分以下になります。日本をはじめとする東アジアの高齢化、人口減少は顕著です。非常に困った問題です。原因は明らかで、出生率の低下です。一人の女性が一生の間に生む子どもの数「合計特殊出生率」が日本では1.20です。人口を維持するのに必要な出生率「人口置換水準」は2.1ですから、かなり大きく下回っています。韓国は1を下回っています。全世界の「合計特殊出生率」は現在2.25で2040年代には2.1を下回る予測です。一方、高齢化は加速します。現在世界の平均寿命は73.3歳で、2100年には男性85.6歳、女性88.9歳になると予測されています。

平均寿命が延びると認知症患者が増加します。厚生労働省の推計によりますと、日本の2050年の認知症患者は587万人と2022年比で32%増加します。認知機能が年相応より低下する軽度認知障害（mild cognitive impairment：MCI）は631万人となり、合計1,218万人、65歳以上の3割に達する数字です。さらに日本の高齢者の問題は深刻で、高齢単身者の数が男女合わせて2050年には1,084万人に達するようです。特に男性単身高齢者のなんと60%が2050年には未婚のまま高齢者になっているという驚くべき予測が出ています。

平均寿命が延びることは喜ばしいことですが、未婚のまま高齢者になる人が年々増加する、このような社会が本当に幸せな社会といえるのでしょうか。

*写真はオンラインジャーナル版に掲載しております。



ル・コルビジェ、ロンシャンの礼拝堂（写真・著者提供）